慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松崎慊堂校刊影宋本『爾雅』について
Sub Title	A research on Erya published by Matsuzaki Kodo
Author	矢島, 明希子(Yajima, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2019
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.54 (2019.) ,p.83- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生前文庫長退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190000-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

松崎慊堂校刊影宋本『爾雅』について

矢島　明希子

はじめに

斯道文庫には、江戸後期の儒学者である松崎慊堂（一七七一－一八四四）に関係する書物が多く蔵されている。それらは浜野知三郎氏の蒐集によるもので、浜野氏の旧蔵書が斯道文庫へ寄贈された際に、慊堂関係のコレクションも斯道文庫へ入った。[1]浜野文庫が寄託から寄贈となった昭和五十五年（一九八〇）、斯道文庫の設立二十周年記念とあわせて「濱野文庫幷近蒐本展観」が開催された。その『創立二十周年記念 濱野文庫幷近蒐本展観書目録』（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編、一九八〇年）の阿部隆一氏による序文「濱野文庫について」は、慊堂の旧蔵書を次のように紹介している。

その圧巻は、江戸後期佐藤一斎と並び称された鴻儒松崎慊堂の自筆校本・書入本・手鈔本・手沢本などが一堂に会していることで、これは浜野氏が偶然の奇縁から慊堂の子孫から一括購得したものと聞いている。慊堂の稿本はその「慊堂日暦」や雑稿等の一部が静嘉堂文庫に儲されるのみで、それを除いては慊堂の遺書は殆どこの文庫の有に帰していると言ってよい。

松崎慊堂は江戸後期に掛川藩に仕え、文化十二年（一八一五）に致仕した。その後は目黒羽沢村に石経山房と呼ばれる山荘を開き、自身の学問と子弟の教育に努めた。[2] 羽沢に移ってからの慊堂は、それまで修めてきた朱子学から転じて考証学に傾倒した。弟子の塩谷宕陰が著した「慊堂松崎先生行述」には「吾志於復古、得之椛斎爲多」と述べたとされ、[3] その転向には狩谷椛斎（一七七五－一八三五）との交遊が強く影響したという。

椛斎は、市井にあってまずは国学を修めたが、後に金石学や考証学へとその学問を展開させ、善本の蒐集と古典籍の整理・研究に尽力した。慊堂は、椛斎の墓闕銘を撰して次のように称揚している。

初余讀書都下。始識翁於市野迷庵之處。翁少於余四歳、聡慧絶倫、發言簡妙。咸中肯綮。心竊異其為人。既而問其所學、則該覧博綜、於書無所不窺。自是以来、交誼漸深、此往彼來。或詰難經義、或商榷古今。反覆推究、有連日夕弗休者。益知涯涘之無窮矣。[4]

慊堂が「則該覧博綜、於書無所不窺」と述べるように、椛斎の貪欲な善本蒐集と、それらに基づく古典籍の校訂が、非常に精緻な作業であったことは、伝存する諸々の書入れ本からうかがえる。『慊堂日暦』（以下、『日暦』）に書き留められた両者の交流は、主に書物と酒杯を中心に展開する。例えば、文政九年一月二十二日の条に「故佐倉大守の小祥、日輪墓に赴き、斎を食す。また芳洲公子（細川芳洲）を訪い小飲す。相携えて晁公寺に入り、大酔す。帰路に椛翁が求古楼下に宿す。酔は覚めて古書四巻を読めば、すなわち暁柝は七鳴す」[5] とあるが如きである。

もう一人、慊堂の考証学や文字学への関心に大きな影響を与えたとされる人物に、漢詩人の山梨稲川（一七七一－一八二六）がいる。慊堂は稲川の死の直後、『日暦』文政九年（一八二六）七月六日の条に「余は玄度と相知聞すること二十四五年。丙子の歳六月、始めてこれを駿の稲川に訪い、ともに出でて久能大廟に謁し、明けて三保に游び、駿府に宿す」と記している。知り合って二十四、五年とあることから、慊堂が掛川藩に出仕していた時期にすでに知り合っていたと思われる。稲川は特に音韻学に優れ、慊堂が撰述した墓銘には、

聞本居宣長之徒論皇國古音、恍惚有悟。於是鑽究廣韻、以

溯漢秦三代。曰、三代之音正也。秦都雍、雍音也。漢起豐沛、多楚音。以及三國六朝、大槩皆方音。非正音也。音韻正而古書始可讀也。……六經百家語、出於秦以前者、皆古文也。唐宋以下、不目睹古文、其說多妄。說文、說古文者也。古文、六書也。古小學、惟學六書也。[6]

とある。つまり、経書を読むには正しい古音で読むべきであり、そのためには『説文解字』（以下、『説文』）を始めとする小学を学ぶことが重要と主張するものである。『説文』を重視したのは椛斎も同様で、『説文新字附攷』等の著作がある。稲川と椛斎は慊堂を通じて知遇を得、『説文』研究によって大いに意気投合したという。[7] このような志から、文政九年三月に稲川は著書『文緯』を世に出さんと江戸に出遊した。椛斎等交遊のある学者を訪問して過ごしたが、病が悪化し、同年七月六日に志を遂げることなく江戸で没した。

慊堂には椛斎や稲川のような『説文』に関する著作はないが、『日暦』には文政九年十二月以降、『説文』を読む記述が散見される。[8]

文政九年十二月十七日

終日説文を読む。佐倉侯は双鳧を与う。

同年十二月二十日

子の舎に在り。終日説文を読む。

二十日の記事では、その後に段玉裁注について言及があることから、この時、段注本を読んでいることがわかる。翌十年には椛斎とともに『説文』を読んだことが記されている。

文政十年六月二十八日

晴、晩陰。巳刻、山荘に入る。椛斎来り書を校すること例の如し。遂に宿す。

同年六月二十九日

陰。ともに説文を読む。

これ以降、慊堂の『説文』会読は『日暦』天保十三年十二月八日条に「（村山）月汀来り説文を読む」とあるまで続く。[9] 斯道文庫には、天保八年及び十年から十二年の識語を存する慊堂自筆書入本『説文解字』（〔明末〕刊　毛氏汲古閣覆宋本、ハ〇九

C・二―二三・八）が蔵されている。該本の第七篇下末尾に藍筆で記された「庚子七月廿八日讀了」という識語は、『日暦』天保十一年（一八四〇）同日に「午後、月汀来り、説文第七篇を読み訖る」とあることに一致する。墨筆細字の書入は欄外だけでなく行間に及び、校読の精密さがうかがえる。[10] このように、慊堂の『説文』校読については、『日暦』や現存する諸本からたどることができ、江戸後期の考証学に関する研究の中でしばしば論及されるところである。[11]

では、『説文』同様、経書を読むための辞書である『爾雅』についてはどうだろうか。慊堂は、最晩年に当たる天保十五年（一八四四）に景宋本『爾雅』、そして『爾雅』を含む縮刻唐開成石経を刊行している。本稿では、試みに慊堂の『爾雅』校訂と刊行の経緯をたどり、斯道文庫所蔵の慊堂校刊『爾雅』について検討を加えたい。

一、『爾雅』校訂

まず、『日暦』によって慊堂の『爾雅』校訂をたどる。『日暦』で最初に『爾雅』を読んだことが記されるのは、文政九年九月である。

○文政九年（一八二六）
九月九日
〈六日に狩谷棭斎と西遊へ出発し、八日に箱根宮之下の藤屋に投宿する）雨ますます大。棭翁と爾雅を訂正す。新聞すること極めて多し。（中略）〈業を罷め、酔中に戯れに爾雅の語を集む。〉

二人は翌十日に棭斎が著した「和名抄訂本」を校正しており、ともに書物を携えての旅行であったことがうかがえる。この日校訂した『爾雅』がどのような本であったかは不明だが、棭斎はこれ以前に明刻経注本や経典釈文・鄭樵注本等によって『爾雅註疏』を校訂しており、[12]「新聞すること極めて多し」とは、その成果が披露されたのかもしれない。

○文政十一年（一八二八）
正月十五日
晴、温。爾雅を校す。（保科）春水来る。堀田子（順兵衛）

来る。鯨羹を造って酒をすすむ。おのおの梅花両枝を送り、携え去る。

六月三十日

佐（藤泰介）・丹（羽忽助）二生と爾雅を校す。夜間、風雨は木を覆し草を摧く。

七月一日

暁起すれば風雨未だやまず。池上の梧桐一株は北撥し、満園の花卉は大半傷残す。上巳、雨やむ。梧を起こしてこれを築く。二生（佐藤・丹羽か）と爾雅を校す。

○文政十二年（一八七三）

正月九日

晴。丹羽生は爾雅を校しおわる。

文政十一年から十二年にかけて、書生の佐藤泰介と丹羽忽助とともに『爾雅』を校訂している。[13] 丹羽は十二年の正月に校訂を終えているが、佐藤の首尾については記述がない。

この二年間は門生と校訂を行っていた慊堂であるが、翌十三年二月には、再び梜斎とともに『爾雅』の校訂を行うこととなった。

○文政十三年（一八七三）

二月六日

（前日の晩に梜斎が来訪）晴、温。ともに爾雅を校し、先ず宋鈔絵図本を読む。（村田）精斎来り宿す。

二月七日

昨の如し。午前、絵図本を校す。おわって、再び前明経注本を校す。

○羽倉明府（簡堂）に与う。[14]

復白す。野本生が帰る時に約せらるところの諸件は、まさに今日を以て報上すべし。只梜斎と人事を絶って十日の全力を以て一書を校定せんことを約せり。よって書巻を移して草堂に入れり。今すでに三日、晨夕に矻矻として、丹黄は手に在り、故を以て未だ上答すること能わず。（中略）なお未だ安んぜるところあり、校書の業のおわるを待ち、梜斎と商量すること一般、以て往きて貢せん。幸いに旬日の寛仮を容（ゆる）されんことを。

二月八日

晴。古明本爾雅を読む。

二月九日
晴、温。浴を設け、書を校す。（中略）盃を絶ち、明古本を校しおわる。
二月十日
晴、温。椛斎去る。
二月十五日
晴、温。（中略）午後、椛斎来り、ともに爾雅を校す。晩、小楼を開いて梅を観る。月また奇にして、蝕は左下におこる。四鼓みな蝕す。余は嘆嗟して曰く、人を以て天を測るに、かくの如く違わず。すなわち今を以て古を測るに、学問の道はまさにかくの如くなるべしと。
二月十六日
晴。風寒し。朝飯し、大聖寺に入り、（椛斎と）ともに爾雅を校す。
二月十七日
早晴。大聖寺に入り、校勘記を校す。午陰る。
二月十八日
早雪は地を覆うこと寸余。校勘記を校す。
二月十九日
腹瀉のために楽しまず。然れども校書を廃せず、飯後に阮校本をおわる。
二月二十日
晴、寒。終日校書し、閩本をおわる。椛翁は為めに団魚(すっぽん)炙を設く。その家人はまた鰻鱺(うなぎ)炙を饋る。この夕、大酔す。
二月二十一日
晴。浴を設く。浴しおわって大聖寺に赴き、万暦監本を読む。小田切生来り、禁を破って一遇す。村山生来る。夜、ともに荘に帰って小酌す。
二月二十二日
晴、寒。大聖寺に赴き、万暦監本を校しおわる。また筒井子（平右衛門）の汲古閣本を借り、上中二巻を校す。
二月二十三日
晴、温。早起して、汲古下巻を校訂し終える。椛斎と出でて陰山氏をよぎり、小酌してともに静斎に赴く。酒を設けて抑留す。日入って高輪に赴き、某氏の空荘を観る。出でて泉岳寺前に至り椛翁と別れ、陰生とともに荘に帰る。
八月十九日
陰。この日はまさに西条の講に赴くべし。（中略）故あり

て講を休み赴かず、終日爾雅疏音注を校す。千文第六十九本を臨す。

この年の二月、慊堂は椀斎とともに集中的に『爾雅』の校訂を行った。椀斎は二月五日から慊堂宅に泊まり込み、六日から七日にかけて絵図鈔本を校訂している。絵図鈔本とは『経籍訪古志』（以下、『訪古志』）に「爾雅音圖」と著録されている清嘉慶六年刊影宋鈔絵図『爾雅』であろう。この本は、前年の文政十二年に官版として和刻本が刊行されている。七日には絵図鈔本を終え、明経注本の校訂に入っている。『日暦』では七日に「前明経注本」、八日に「古明経注本」、九日に「明古本」とある。これらの「前」・「古」が何を指すのか、同本なのか別本なのか、『日暦』の記述からは判然としない。[15]

椀斎は十日に帰宅した。七日の条には、羽倉簡堂への伝言として、椀斎と人事を絶って十日間校書に励むことを約束した旨が記されているが、六日に校書を始めたとすると、必ずしもこの約束通りには進んでいなかったようである。その後、十五日に椀斎が再び慊堂を訪ねて二十三日に別れるまで、途中来客への対応があるものの、当時下豊沢村（現在の渋谷付近）にあった大聖寺に籠もって爾雅諸本の校訂が行われた。[16]十五・十六日は、何本を用いたのか記されていない。十七・十八日の校勘記は、十九日に阮校本とある阮元の校勘記と推測される。二十日は閩本、二十一・二十二日は万暦監本、二十二・二十三日に汲古閣刊本を校訂し、散会した。六日に宋鈔絵図本を用いて校訂を始めてから、中断を挟み二十三日まで、十一日間のうちに、次の諸本を椀斎と二人で校訂したことになる。

宋鈔絵図本
前明経注本
古明経注本
明古本
校勘記
阮校本
閩本
万暦監本
汲古閣本

このうちには同本と思しきものも含まれるが、慊堂と椀斎の校訂作業が非常に精力的なものであったことが見て取れる。

ここからしばらく時を置いて、八月十九日、慊堂は毎旬九の

日に行なっていた西条藩の講義を休み、終日爾雅疏音注を校訂して過ごした。

○天保二年（一八三一）

一月一日

客歳十二月十六日、天保と改元す。晴。停午、東風やや寒し。早起して餼羹を進め、諸生を召してともに食す。おわって〈七席〉、堂に坐して納拝し、ともに爾雅を読む。余はここにおいて華甲一周し、環ってまた始まる。典学五十年、大学よりして入る、故に実際なし。今より以往は旧日の過を補い、以てここに従事せん。すなわち王柏の所謂倒学、或はこれを能くせん。これ本年の事業を志す所以なり。

一月五日

陰。（中略）寒きこと甚だしく、終日被を蒙って臥ず。爾雅を読むこと一過す。

一月十三日

陰り且つ風ふき、にわかに寒し。（中略）巳刻、宮崎平大夫来語して刻を移し、酔うこと甚だし。被を蒙って臥養し、昏にいたり爾雅を読むこと一周す。

一月二十二日

晴、寒。午前、寤言室にて白酔し、爾雅を読めば殊に妙なり。

五月十三日

（九日に堀田汝貽および齋藤又左衛門と山荘を出立し、十一日に箱根宮ノ下の藤屋に投宿。十二日より雨）飯後、ともに爾雅一二段を読む。午後、雨やむ。

この年は一月を中心に『爾雅』を読んでいる。還暦を迎えた慊堂は、これまでの学問を振り返り、それが空虚なものであったと評した。そして、経典の文献批判的研究に没頭した宋の王柏を引き合いに出し、自己が今後志す道を宣言した。その元旦に諸生との会読に選んだのが『爾雅』であり、慊堂の関心が強く小学に向かっていることは明白である。

○天保三年（一八三二）

正月一日

晴、温。餼羹を進むること例の如し。生徒と爾雅を読む。

九月十一日

雨。熱は解け涕は収まる。諸生と爾雅二板を読み、校字を

作る。

この年も、前年と同様、元旦には諸生と『爾雅』を読んだ。また、九月十一日には二板を対校している。

この後天保四年以降は、『爾雅』諸本の貸し借りや、後述する縮刻石経本刊行に関する記述が見られるが、これまでのように諸生と爾雅の校読をしたという記述は、天保七年まで途絶える。

○天保七年（一八三六）

二月二十四日

（前日の暁に強風にて北方に火事あり）また風あり。北方に火あり、書生は出でて観る。余は終日爾雅を訂す。まさに晡ならんとし、書生は還って云う、小石川町高松主殿傍の松下伊勢守の邸なり。延焼すること頗る広し。

二月二十五日

晴、温。書生と爾雅を読み、釈詁に止む。浴を設く。浴しおわって爾雅上〈一巻〉を校訂す。化日また暝（く）る。

二月二十六日

晴、温。爾雅を校し、中巻を尽くす。生徒の講を聞く。地震うこと頗る長し。

二月二十八日

早陰、辛巳、午晴。黒雲は東北に盪摩すれども、遂に雨ふらず。終日、爾雅を校す。

天保七年は二月二十四日から二十八日にかけて、火災や地震などの災害の中、『爾雅』の校訂が行われた。ここでは上中下の三巻本を用いていることから、この時の底本は、少なくとも注疏本ではなく経注本であったと推測される。

以上に、『日暦』に見える慊堂の『爾雅』校訂に関する記述を抽出した。校訂に用いた本がどのような本であったか、明記されない場合が多いが、文政十三年二月に椀斎と行った校訂事業は、何本を用いたのかを記し、「人事を絶って」行う大事業であった。この後は再び刊行事業に関する記述が見られ、天保十四年十月には校譌を審定している。校譌については後述する。

二、『爾雅』刊行―縮刻石経本と影宋本

慊堂の善本翻刻事業は、晩年の大きな功績である。天保十三

年、幕府が十万石以上の諸侯に大部の書を出版するよう命じた際に、慊堂は官刻すべき書物について説いた意見書を提出した。この意見書の中で慊堂は、明版には誤字が多く、質が落ちることを嘆き、山井崑崙の『七経孟子攷文』を例に挙げ、これと同様に善本によって諸書を校勘し刊行することを提言している。[17] さらに慊堂は、具体的な書目について現行本の問題点を指摘し、官刻するにあたって底本とすべき宋元版や旧鈔本等を示した。[18] これらの刊行は実現しなかったが、いかに慊堂が善本の刊行に情熱を傾けていたかがうかがえよう。

慊堂が自身の善本翻刻事業として縮刻唐開成石経刊行に着手したのは、意見書を提出する以前の天保五年の春頃とされる。石経のテキストを宋版や古鈔本によって校訂し、掛川侯や佐倉侯等の援助を得て十二経と五経文字・九経字様の開板にこぎつけた。斯道文庫は、その縮刻石経所収本及び複数の影宋本『爾雅』を蔵している。次にそれぞれの刊行について、斯道文庫本によって検討したい。

I. 縮刻唐開成石経所収本

爾雅三巻　　大一冊（八〇九C・七－一・四一）

闕名撰　〔松崎慊堂〕校

〔天保十五年跋〕刊（〔江戸　松崎氏石經山房〕）

掛川藩德造書院舊藏

香色表紙（二十八・八×二十・六糎）、題簽剝落、緑色包角、五針眼綴。

郭璞「爾雅序」あり。

序末行に接して本文巻首「爾雅巻上（隔九格）郭璞注／（低一格）釋詁第一（隔八格）釋言第二／（低一格）釋訓第三（隔八格）釋親第四／釋詁第一／初哉首肇祖元胎俶落權輿始也林烝天帝皇」。

四周単辺（二十一・八×十五・二糎）、毎半葉八行十九字、字傍に圏点あり。

版心白口単黒魚尾。

尾題「爾雅巻上（中・下）」。

印記：序題下に単辺長方形陽刻「益城松崎／明復審定」朱印記あり、序首に双辺長方形陽刻「德造書院」楷書朱印記（掛川藩校）、単辺長方形陽刻「含雪亭藏」朱印記、双辺長方形陽刻「夫（矢？）部氏藏」隷書朱印記、双辺長方形陽刻「濱野文庫」楷

書朱印記、双辺長方形陽刻「麻生文庫」楷書朱印記あり。

該本は掛川藩校の旧蔵本である。縮刻石経刊行に際して、慊堂に縁のある諸侯が刻費を負担した。慊堂が以前に仕えていた掛川藩太田侯もその出資者の一人である。

慊堂刊縮刻石経の特徴は、石経のテキストに校訂を加え、校字に傍点を附す点にある。『日暦』には天保五年頃より、縮刻石経の刊行に関わる記事がしばしば記されている。全体の概要は、高橋美章「松崎慊堂の開成石経縮刻に就きて」（『支那学』第二巻第一号、一九二二年）を参照されたい。

慊堂は、縮刻石経の『周易』の冒頭に「縮刻唐石經例言」を掲げ、校訂及び加点について次のように述べる。[19]

一開成石經之刻（中略）其殘闕剝落處、則宋本最古且確者補入、施點右旁以別之。

一石經雖最古可貴、時訛謬（中略）石經誤脱無疑者、從諸善本而改補之。疑不能決及後儒考證確不可易而無別本可據正者、姑從原本並發圈左旁。

これによると、摩滅等で石経の文字が判読不能となり宋本等から補った場合には右側に傍点を附し、石経の文字に明らかな誤脱がある場合にはこれを他の善本から補うが、疑わしいものの、確証が得られない文字はひとまず原本に従い、左側に圏点を加えたとする。[20] 吉田篤志氏が指摘するように、こうした方針は、石経元来のテキストへ近づこうという試みであり、かつ石経と諸本との異同を明確に示すものである。[21]

天保五年以降、『日暦』には縮刻石経に関して慊堂と彫工と思しき人々とのやりとりが見える。例えば、以下のようなものである。

天保五年二月二十四日

晴、西北風。宮田定七〈敬輔〉来り、爾雅のことを嘱す。

同年八月二十九日

晴、浴を設く。宮田敬輔来り、爾雅の板を補う。西条侯は病疾を以て講を辞す。晩、佐倉に赴き凡斎に宿す。

天保六年閏七月二十八日

晴朗にて甚だ適す。（中略）田口漢助来り、爾雅の釘句を

属す。

天保七年十二月二十九日

（前略）夜、河瀬生・宮田彫工来り、おのおの刀価・筆価を求む。

これらの記述から、縮刻石経が次第に完成していく様子がうかがえるが、実際に刊行されたのは天保十五年の慊堂の死後であった。[22]

Ⅱ．影宋本爾雅

A．有仁館旧蔵本【図1】

爾雅（外題影宋本爾雅）三卷 附音釋三卷校譌一卷　大一册

（八〇九C・七－四・一）

〔晉〕郭璞注　松崎〔慊堂〕（復）校

天保十五年跋刊（江戸 松崎氏石經山房）　覆狩谷棭齋令摸

抄宋本

有仁館舊藏

淡茶色表紙（二十六・〇×十八・二糎）、左肩に刷題簽「影宋本爾雅　〈完〉」を貼付、緑色包角あり。

封面表「景宋本爾雅」（篆書）、裏「羽澤石經山房刻梓」（隷書）。

郭璞「爾雅序」あり（一張）。

本文巻首「爾雅上／（低八格）郭璞注／（低二格）釋詁第一（隔四格）釋言第二／（低二格）釋訓第三（隔四格）釋親第四／釋詁第一／初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也（以下注小字双行）」

左右双辺（二十一・六×十四・四糎）、有界、毎半葉十行二十字、注小字双行（行三十字）、字傍に校点「・」あり。

版心白口単黒魚尾、下辺に刻工名あり（江通・陳忠・施蕩・洪先・胡端・心・朱諒・洪茂・施章・陳高・劉昭・朱因・方成・洪乗・陳眞・洪新・毛涓・陳才・楊瑜・朱章・呉宗・王允）。

尾題「爾雅上（中・下）」、毎巻尾題下に隔四格して経注字数あり。

毎巻尾題後に改張して「爾雅音釋」あり。

末尾に「挍譌」あり（五張）。

「挍譌」に接行して跋文あり。

此本係北宋仁宗時刻版、南宋高宗時補刊。敬驚弘殷匡胤玄朗恒禎貞禎徽等字、皆欠筆。其係補刊者、版心各有重刊重開記。又桓遘二字欠筆、餘溝購等字及桓字、係原刻者皆不欠筆、此可證也。原本京師大醫某君所藏、亡友狩谷卿雲借鈔極精。余病有宋以來此經滅裂、欲訂一本以貽後學、顧世無善本。忽睹是本、急請卿雲獲之入刻、有年所未敢出

以問世者、猶恐其有訛脱也。後又得室町氏時翻刻大字本、蓋所謂蜀本也。（毎半葉八行行十六字注雙行行廿一字）詳攷其體貌、蓋與是本後先所刻、亦有南宋孝宗時補刊。（帝諱欽筆、皆與是本同。其係補刊者、桓遘慎三字皆欽筆、餘溝購等字及桓慎二字、係原刻者、亦不欽筆。）其字豐肥、雖異是本之謹肅、至其源流實同、故據以訂正、參以元明諸本、其訂正異同處、旁施黒點、仍作校譌附末簡。庶存是本之舊使讀者兼知二本之異同也。是本毎巻末有音釋、不審誰氏所作。（案、晁公武讀書志曰、爾雅有釋知審及陸朗釋文、毋昭裔以一字有兩音、或三音、後學生疑於呼讀、釋其文義最明者爲定。有爾雅音略三巻、今此音釋雖零星數紙、亦分爲三巻。或係音略舊本歟。但毋昭裔乃孟蜀宰相、而大字本不載是音、則大字本亦第宋本、而非蜀本也歟。）大字本所不載、但元明諸注疏本及無名氏本皆收之。繪圖本亦取、附經文各處下、頗有異同。因取各本訂正、以次合附巻末、所以便于檢閲也。若夫結字點畫不正者、余自有訂定經本在、故一依是本之舊。云天保甲辰春月益城松崎復識、時年七十有四。

昔、謀此刻時、沼田藩士堀田筠庭〈光長〉縮其俸金、一鎰所資、故是刻不踰時而成。顧太樸不可即用、校以十餘本。予性寛緩、卒業太晩、久曠筠庭之高誼。又吾七十以後衰病、相仍學子渡邊〈魯〉山井〈璞〉出入持養、無所不至小間、則侍筆此校、所載如段〈玉〉裁阮元郝懿行諸説、皆其所録入。其功兩不可忘、因得連綴而書。復又識。（句読点は筆者）

印記：封面表に単辺方形陽刻「有仁館／藏書印」朱印記、単辺円形陽刻「□川」小朱印記あり。

慊堂の跋文によると、京都の医師所蔵宋版を狩谷棭斎が精写した本を慊堂が蜀本や元明の諸本と校勘し、末尾に校譌を付して覆刻したものとする。底本となった宋版は、『訪古志』に「崇蘭館蔵」とされる一本で、『訪古志』でも闕筆を根拠に、底本の刊行時期を北宋仁宗時刻、南宋高宗二補刊としている。斯道文庫所蔵の校譌草稿（ハ〇九C・一－二一・一）では、補刻及び闕筆の情況について、より詳細に述べられている【図2】。

宋本爾雅校譌

此本、係北宋仁宗時刻版、南宋高宗時補刊。（巻上、四板十二板十三板十五板。巻中、二板三板六板七板十板十二板十六板。巻下、一板二板三板八板九板十一板十二板十四板廿板。版心各有重刊重開等記。餘皆原刻。）故翼祖諱敬、（嫌名驚。）宣祖諱弘殷、太祖諱匡胤、舊名玄朗。眞宗諱恒、仁宗諱楨、（嫌名貞禎徵。）皆缺筆。英宗父濮安懿王允讓、英宗諱曙、（舊名宗實。）神宗諱頊、俱不闕筆。欽宗諱桓、補刻時修改。高宗諱構、凡从冓字、遘溝購皆缺筆、是本皆不缺筆、但係重刊處、缺遘字中一筆。餘溝購等字係原刻者、及孝宗諱脅、（嫌名慎眞。）光宗諱惇、

嫌名敦。皆不缺筆。（句点は筆者）

この鑑定に対して、斯道文庫編『創立二十周年記年　濱野文庫并近蒐本展観書目録』の解題は次のように述べる。

この本の底本となった崇蘭館蔵本は現在亡失せるか否か行方を知らぬが、補刻のない同版本が瞿氏鉄琴銅劍樓に蔵され、現在北京図書館の有に帰し、四部叢刊に影印されている。本版を当時慊堂等は北宋仁宗時刊南宋高宗時修と審定したが、実は南宋紹興年間刊南宋前期修と鑑定すべきである。

この解題では南宋刊本とする根拠が示されていない。原刻本として挙げられた現在の国家図書館蔵本を影印した中華再造善本の『中華再造善本總目提要』（唐宋編）は、北宋の名諱・廟諱を避けるのは南宋初期の習慣であり、南宋高宗趙構の嫌名は厳重に避けられているが、次の孝宗の「慎」は避けられていないことから、高宗期の刊行とする。また、紹興年間に杭州で活動した刻工の名が見られるため、南宋初期杭州刊本と鑑定している。[23]

高宗の諱「構」に関して慊堂は、重刻張では「遘」が闕筆するものの、原刻張では「溝」や「購」は避けられていないとして高宗期の重刊としたが、原刻とされる国家図書館本も「遘」や「彀」は一画闕いているため、[24]「構」の闕筆は重刻張であるという慊堂の説は覆ることになる。ひとまず、本稿では『濱野文庫并近蒐本展観書目録』及び『中華再造善本總目提要』に従い、南宋初期刊と見たい。[25]

慊堂影宋本は、版心に「重刊」や工名の異同があることから、底本に補刻張が多くあったことがうかがえる。例えば、国家図書館本では巻上第十二張に「施章」とあるのに対し、慊堂影宋本では「胡端重開」に作っている。阿部隆一氏「宋元版刻工名表」[26]を参照すると、施章の名は紹興刊『文選』（足利・北京〈潘録〉宋修補刻張・東洋補刻張）・紹興十九年跋刊『徐公文集』（大倉）・孝宗朝刊『尚書正義（単疏本）』（書陵）に見える。一方、胡端の名も紹興刊『文選』（東洋補刻張）に見える。巻中第三張では「江通」が「刘昭重刊」となっており、江通は紹興刊『文選』（足利）・南宋初刊宋元明修『資治通鑑目録』（中央・四部叢）・南宋初刊南宋前期修『史記』（語言）・紹興初刊『新唐書』（静嘉）に見える。劉昭は南宋孝宗頃両浙東路茶塩司刊宋元通

修『尚書正義』（足利）・紹熙三年両浙東路茶塩司刊宋修『礼記正義』（同前）・南宋孝宗頃両浙東路茶塩司刊宋元明逓修『周礼疏』（故宮）・宋理宗間浙刊『古史』（同前）等に見える。二例ともに、原刻刻工と補刻刻工の間には大きな時間的隔たりがないことから、慊堂影宋本の底本は南宋高宗期からそれほど下らない南宋前期に補刻されたと推定できよう。

椒斎がこの本を摸抄した経緯について、森鹿三氏が「慊堂日暦に見ゆる経籍」（『史林』第二十五巻第四号、一九四〇年）の中で触れている。森鹿三氏は、椒斎が京都の福井家崇蘭館で『新修本草』巻十五を摸抄したのが天保三年の西遊の折であったとし、[27]『日暦』の天保三年閏十一月三十日条に、慊堂が椒斎の土産話を聞いて、[28]

大字本爾雅以下八日所聞、石川影抄　伊良子長門介藏覆蜀本五山所刻

と記していることから、椒斎摸抄本はこの時に椒斎が石川某に摸抄させたものとする。しかし、「大字本」とは通常蜀本を指し、直後に「覆蜀本五山所刻」とあること、慊堂が影宋本の跋文で「後又得室町氏時翻刻大字本、蓋所謂蜀本也」ということからすると、『日暦』の「大字本爾雅」が即ち本書の底本となった杭州刊本を指すとするには躊躇われる。椒斎は、これ以前の文政四年（一八二一）四月にも崇蘭館を訪問している。[29]また、慊堂の跋文では、他に善本が見出せず、訛誤があることを恐れて世に問うことを見送っていたが、後に蜀大字本を得たために校勘が可能になったということから、影宋本の底本は蜀大字本以前に摸抄されていたと考えるのが妥当であろう。鈴木瑞枝氏は、文政から天保にかけて行われた『爾雅』の校訂は、椒斎が摸抄した影抄宋本に基づくものと見ている。[30]現在のところ、椒斎が文政四年の崇蘭館訪問の際に『爾雅』を摸抄したという確たる証拠は見出せないが、少なくとも『日暦』天保三年の「大字本爾雅」を影宋本の底本とする説には首肯しがたい。これはむしろ、影宋本を校合する際に用いられた「室町氏時翻刻大字本、蓋所謂蜀本」ではなかろうか。

椒斎がいつ崇蘭館本を摸抄させたのか、已然不明瞭であるが、慊堂は縮刻石経と同様に、この本に校勘を加え、訂正した箇所に傍点を施し、末尾に校譌を附した。

『日暦』には、天保十四年十月十三日から十六日にかけて、弟子の渡邊魯輔と校譌を審定したことが記されている。

十月十三日

晴、寒さ骨を驚かす。（中略）魯甫と爾雅校譌一巻を定む。

十月十五日

晴、寒。この日、佐倉は政を謝し、相公は小川町賜第に移ると聞く。魯甫と爾雅を定め釈中に至る。

十月十六日

晴、寒。（中略）午餐前、爾雅校譌を定め訖る。

ここに登場する渡邊魯輔は、山井璞輔とともに病身の慊堂を助けたことが跋文に附記されている。

校譌に明記された校合本は以下の十四本である。[31]

大字本（五山版）
絵図本
単疏本
雪窻本
正徳補刊本
元版注疏本
李元陽注疏本
閩本
石経
阮元
鄭樵（爾雅注）
翟灝（爾雅補郭）
邵晋涵（爾雅正義）
郝氏爾雅義疏

このうち、『日暦』で校書したことが記されているものは、宋鈔絵図本・阮元校勘記・閩本であり、文政十三年二月に椛斎と校書した成果が反映されたものと推測される。椛斎との関係で言えば、前述した斯道文庫蔵椛斎自筆書入本『爾雅註疏』は李元陽刊本であり、そこに見える椛斎の校訂には、元刻注疏本・昌平坂学問所蔵元刊本・単疏本・雪牕本・正徳本・明刻経注本・鄭樵注本等、元明の諸本が用いられている。これらと慊堂の校譌で示された諸本は共通するものが多く、椛斎の校訂との関係性がうかがえる。また、跋文の末尾に、段玉裁や阮元・郝懿行の諸説は渡邊魯輔と山井璞輔が代筆したものであると述べ、その功を讃えている。これら清朝考証学者の著作のうち、特に郝懿行『爾雅義疏』は比較的新しい成果ではなかろうか。[32]

加点について、慊堂は跋文で、

其訂正異同處、旁施黒點、仍作挍譌附末簡。庶存是本之舊、使讀者兼知二本之異同也。

と述べ、校合で訂正した文字には傍点を加え、校譌を附すことで、底本の原形を保存し、読者が他本との異同を確認できるようにした。この方針は縮刻石経と同様である。

例えば、上巻第一張表第七行注の「胚」には傍点が打たれている【図3】。そして、校譌では「釋詁注胚胎」と訂正した字句を示し、その下に小字双行にて「胚舊譌胚、今據大字本訂正。以下凡經注補正、處不云據某本者皆同」とする。

ここでいう大字本とは、跋文に「後又得室町氏時翻刻大字本、蓋所謂蜀本也」と記され、『訪古志』に「京師高階氏藏」と著録された一本である。ただし、前掲『日暦』天保三年閏十一月三十日条の「大字本爾雅以下八日所聞、石川影抄」が用いられたとすれば、刊本ではなく石川某による摸抄本を用いたことになる。さらに、『日暦』天保四年五月八日条には、

（前略）椧斎より書来り、陶淵明集影宋本を借り、また大字本影抄爾雅を致す、山本頤庵の本なり。

とあり、椧斎を経由して山本頤庵の摸抄大字本を借りている。頤庵の摸抄本がどのような経緯で写されたものか定かではないが、慊堂が校合に用いた本は、こうした摸抄本であった可能性も考えられよう。[33]

伝存する覆蜀大字本五山版の刊本には、神宮文庫旧蔵本がある。現在は慶應義塾大学文学部の佐藤道生教授のご所蔵であるが、筆者はこの度、佐藤先生のご厚意により該本を拝見する機会を得た。そこで、次にその詳細を記す。

爾雅三巻　　**大一册**

〔晉〕郭璞注　〔南北朝〕刊

栗皮色表紙（二十七・三×二十一・〇糎）、外題なし、右辺に打付にて「外」「第十□」と墨書。

序文なし。

本文巻首「爾雅上（隔五格）郭璞注／（低二格）釋詁第一（隔二格）釋言第二／（低二格）釋訓第三（隔二格）釋親第四／釋

詁第一／初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也尚書曰三」
左右双辺（二十三・二×十五・八糎）、有界、毎半葉八行十六字、注小字双行（毎行二十一字）、稀に墨釘あり。
版心白口単黒魚尾。
尾題「爾雅巻上（中・下）」、巻下のみ一行隔して経注字数あり。
大尾に「（低二格）將仕郎守國子四門博士臣李〈鶚〉書」あり。
印記書入等なし。

該本の解題は、長澤規矩也氏編著『神宮文庫漢籍善本解題』（神宮司庁、一九七三年、二九－三二頁）に詳しい。該本は現在郭璞の序文を欠くが、神宮文庫所蔵時には郭璞の序文を有しており、「興聖寺公用」・「秋月香風／樓磯氏印」・「江藤文庫」各陽刻長方形朱印記が捺されていた。また、大尾には「欽賞」と墨書され、「古經／堂」陰刻長方形印記があったというが、現在は該当箇所の料紙が切り取られ裏打修補されている。[34]

『訪古志』に著録された高階氏蔵本や椛斎が摸抄させた大字本は、現在行方が知れないため、神宮文庫旧蔵本によって上記の校訂を確認すると、大字本では慊堂が指摘した箇所を確かに「胚」に作っている。なお、崇蘭館本の原刻とされる国家図書館本では「胚」に作る。また、巻上第二張表第十行注「詩傳」について、校譌は「詩譌左」とし、「左傳」に作っていたものを改めたとするが、大字本・国家図書館本ともにこれを「詩傳」に作っている【図5a、c】。これは、椛斎が摸抄させた崇蘭館本が「左傳」に作っていたか、あるいは摸抄の際に写し誤った可能性が考えられよう。残念ながら、崇蘭館本も行方知れずのため、これを確認することはできない。[35] しかし、この校譌によって摸抄本の有り様をうかがい知ることができる。

なお、斯道文庫にはこの他に二本の同版本を有している（森氏書入本〇九一・ト一二五・一、安井文庫二二Ⅰ・a・六）。森氏書入本については後述する。

B．慊堂手沢本【図6】

爾雅三巻 附音釋三巻　　**大一冊**

（ハ〇九C・五－一九・一）

〔晉〕郭璞注　〔松崎慊堂〕校

〔江戸後期〕刊（江戸 松崎氏石經山房）　覆〔狩谷椛齋令摸抄宋本〕

松崎慊堂手澤

渋引表紙（二十六・五×十九・五糎）、外題なし、表紙裏に反故を用う（人物図あり）。

封面表「景宋本爾雅」（篆書）、裏「羽澤石經山房刻梓」（隷書）。

郭璞「爾雅序」あり（一張）。

本文巻首「爾雅上／（低八格）郭璞注／（低二格）釋詁第一（隔四格）釋言第二／（低二格）釋訓第三（隔四格）釋親第四／釋詁第一／初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也（以下注小字双行）」

左右双辺（二十一・二×十四・四糎）、毎半葉十行二十字、注小字双行（行三十字）、稀に墨釘あり、間々傍線あり。

版心白口単黒魚尾、下辺に刻工名あり（Aと同じ）。

尾題「爾雅上（中・下）」、四格低して経注字数あり。

毎巻尾題後に改張して「爾雅音釋」あり。

印記：封面表に四周双辺長方形陽刻「濱野文庫」楷書朱印記、四周双辺長方形陽刻「麻生文庫」楷書朱印記あり、序首に方形陰刻「辛卯／明復」朱印記あり。

該本はAと同版であるが、Aは他本との異同に傍点を附すのに対し、該本は傍線を附す【図4】。Bで傍線が附された箇所は、Aの傍点の箇所よりも多く、また、傍線のない箇所にもAとBの間には文字の異同がある。以下に巻上釈詁から例を挙げる。校譌で言及のないものには＊を付した。

〈A〉	〈B〉
第一張表第七行注	
「胚•」	「胚」
第一張表第九行本文	
「路」	「路」＊
第一張裏第二行注	
「大」	「夫」
第一張裏第十行注	
「虢」	墨釘＊
第二張表第三行注	
「者•」	「耆」
第二張表第十行注	
「詩•」	「左」
第三張表第三行注	
「卜•昇•」	「卜昇」
第三張表第七行本文	
「晧」	「皓」
第三張表第九行本文	
「褘•」	「褘」[36]
第三張裏第一行本文	
「燮•」	「爽」
第三張裏第二行本文	
「拔」	「拔」＊
第三張裏第四行本文	
「摟」	「樓」
第三張裏第九行本文	
「頹•」	「頹」
第四張表第二行注	
「戮•」	「戮」

第四張表第四行注　「多•」　「怠」
第四張表第四行注　「瘟•」　「癇」
第四張表第五行注　「者•」　「者」
同　「迨•」　「治」
第四張表第六行注　「飢」　「飢」＊
第四張表第八行本文　「祗•」　「祇」
第四張表第九行本文　「底•」　「底」

※同張第十行注・同裏第九行注も同様

第四張表第十行注　「栽」　墨釘＊
第四張表第一行注　「此」　空格
第四張裏第二行本文　「肚」　「肚」＊
第四張裏第三行注　「忠」　「忠」＊
第四張裏第四行注　「訛」　「訛」＊
第四張裏第五行本文　「釗」　「釗」＊
第四張裏第六行本文　「覡」　「覡」＊
同　「誦•」　「誦」
第四張裏第九行注　「傳•」　「傳」
第五張表第七行注　「畏•」　「畏」
第五張裏第一行注　「忕•」　「忕」
第五張裏第七行本文　「棲•」　「捿」
第六張表第一行本文　「郡•」　「郡」
第六張表第四行本文並注　「覷•」　「顧」
第六張表第九行本文　「使•従•」　「從使」
第六張裏第一行注　「縮•」　「緒」
第六張裏第一行本文　「纂」　「纂」＊

上記のうち、第二張表第十行注A「詩」とB「左」の異同について、「左」に作るのは誤りであるとして慊堂が「詩」に改めたとするが、原刻本である国家図書館本では「左」ではなく「詩」に作っていることはすでに述べた【図5a～c】。また、第一張裏第二行注のA「大」とB「夫」、第四張表第四行注A「多」とB「怠」、第四張表第四行注のA「瘟」とB「癇」、第四張表第九行本文以下のA「底」とB「底」、第四張裏第一行注のA「此」とBの空格、第六張表第四行本文並注のA「覷」とB「顧」、第六張表第九行本文のA「使従」とB「從使」でも同様に、Aと国家図書館本は同じ文字に作っている。

このように比較してみると、Bは慊堂が校正する以前のテキストをとどめており、Aの校正刷に当たるものと考えられる。[37]

つまり、慊堂が用いた底本、即ち校斎摸抄本に近いテキストを存しているといえるのではないだろうか。重刻張の文字の異同や、摸抄の際の誤写がどの程度あるのか、現時点では確認し得ないが、慊堂の校訂によって、Aはより原刻に近づいた。ただし、該本には慊堂の蔵書印が認められるものの、書入れ等は見られない。

三、影宋本爾雅と森立之・約之

斯道文庫では、さらに森立之・約之父子書入の影宋本『爾雅』を蔵している【図7】。最後に、これについて検討したい。

爾雅三卷（外題影宋本爾雅）附音釋三卷校譌一卷　大一册
（〇九一・ト一二五・一）

〔晉〕郭璞注　松崎〔慊堂〕（復）校

天保十五年跋刊（江戸　松崎氏石經山房）　覆狩谷棭齋令摸抄宋本

森約之・大槻文彦・ホーレー・川瀬一馬舊藏

香色表紙（二十九・〇×二十・〇糎）、左肩刷題簽「影宋本爾雅〈完〉」貼付、改糸、五針眼綴。

以下版式はAと同版。

書入：全体に墨筆にて欄外及び行間に補注・案語・校注・音注等書入れあり（森立之及び約之筆）。

印記：封面に単辺方形陽刻「森／氏」朱印記、単辺長方形陽刻「森氏開萬／冊府之記」楷書朱印記、単辺長方形陽刻「大槻文彦藏」楷行書朱印記、単辺方形陽刻「寶玲文庫」行書朱印記あり、大尾に双辺八角形陰刻「一馬」朱印記あり。

該本には全体に森立之及び約之父子の書入れがあり、多くは約之の筆と見られる。内容は、校注を中心に諸説の引用や、草木の和名との同定など多岐にわたる。そのうち、識語に当たるもの、底本に関するもの等を以下に抜き出した。

（ア）封面裏（約之墨筆）

阮元是説洵可尊尚矣而今此宋本悉与陸佃所見本文字相合噫善美俱盡／也但此宋本釈草作荸麻母与陸本作荸麻母唯是一異而已荸荸何是俟后／攷元治甲子七／月十九日約之／棲庭

書

（イ）序首欄外（立之朱筆）

朱筆以李鶚本校

（ウ）同所（約之墨筆）

約之家亦臧此翻刻宋本當時松崎翁親自訂刻訛欄上朱字點者也不亦珍乎慶應戊辰秋月記

（エ）同所「朱筆以李鶚本校」下（約之墨筆）

李鶚大字本京師高階氏臧五山板／江戸曲直瀬養安院及山本頤庵景／摹五山板而臧焉

（オ）巻上第十五張裏尾（約之墨筆）

家大人曰宋板書之末巻唯有経注字数者北宋板也毎巻末有之者南宋板也而此本松崎跋曰此本係北宋／仁宗時刻板

（カ）巻上第十八張裏欄上（約之墨筆）

案此音釈末脱爾雅／音釋巻上題名而中／巻題名亦脱音釋二／字宋板尚存李唐以／上寫本不定之善躰／亦是可尊矣

（キ）巻下第十七張表尾（立之朱筆）

癸未四月九日以李本一校　立之

（ク）校譌第五張裏（約之墨筆）

案西清尓疋之學極盛而廑抱元明諸本爲極貴本邦有五山翻刻五季李鶚本次有此北宋／刊本豈〈不？〉富宗典文献足徵乎

（ケ）跋文第二張表（約之墨筆）

弘化丙午約之十二歳家／大人往江都購歸以與約之於此冊時我家／居相州筑井縣數／瀬村尓來日夜乎不／釋此冊以讀古醫経未見荅恩之發明／安可不憤悱啟發而／止虖

該本はまず医者の森立之・約之父子の手にあり、その後、約之の妻の弟である大槻文彦に渡り、フランク・ホーレーや川瀬一馬という錚々たる愛書家の手を経た一本である。

約之は、父の立之が該本を入手した当時について、（ケ）で述懐している。立之は奔放な人物として知られ、天保八年（一八三七）に福山藩医を免職になった後は、妻子とともに相州で浪人生活を送っていた。川瀬一馬氏「森立之・約之父子」[38]によると、弘化元年頃、勝瀬村（旧津久井郡、現在の神奈川県相模原市付近）に落ち着いたという。「相州筑井縣數瀬村」とは、ここをいうのであろう。弘化丙午（三年、一八四六）の年、立之は江戸で慊堂校刊影宋本を購入し、当時十二才の約之に与えた。これは、慊堂が跋文を撰述した天保十五年（一八四四）の二年後に当たる。

また、（ウ）で、

約之家亦臧此翻刻宋本、當時松崎翁親自訂刻訛欄上朱字點者也。不亦珍乎。

とあることから、約之が影宋本をもう一本蔵していたことがわかる。しかも、これは慊堂自ら朱筆で誤りを校訂した自筆校本であったという。影宋本の自跋は天保十五年の春の年記があり、その後に堀田光長や渡邊・山井への謝辞が附記されている。慊堂が没したのは、その夏の四月のことである。『日暦』も同年三月十九日で絶えていることを踏まえれば、影宋本刊行後に慊堂が自ら書入れる余力があったとは考えにくい。「刻訛」を訂正したという点からしても、約之所蔵のもう一本は校正刷の自筆校本であったのではないかと想像される。

管見の限り、森父子の識語のうち年記のあるものは（ア）約之の「元治甲子」（元年、一八六四）、（ウ）「慶應戊辰」（四年、一八六八）、（キ）立之の「癸未」である【図9】。（キ）は、冒頭の（イ）と対応するものと考えられる。（イ）は、（ウ）と（エ）を含む約之の書入れに取り囲まれており【図8】、その位置関係からして、少なくとも（ウ）より早く書き入れられたと考えられるため、（キ）の「癸未」も慶応四年以前と推測される。しかし、影宋本跋文の天保十五年以降の癸未の年は明治十六年（一八八三）であり、立之が該本を購入した弘化三年以降、慶応四年以前に癸未の年は含まれない。[39] 立之の没年は明治十八年（一八八五）であるため、明治十六年に（キ）を書入れた可能性がないわけではないが、（キ）の「以李本一校」という識語からは、（イ）との間にそれほど時間の隔たりがあるようには思われない。立之の誤記であろうか。本稿ではひとまず（キ）の書入れ時期の確定を保留したい。

次に校合本について見たい。まず、（イ）で明記されているとおり、字傍に朱筆で記された校注は、立之による李鶚大字本との校合注である。これについて、約之は（エ）で、

李鶚大字本、京師高階氏臧五山板。江戸曲直瀬養安院及山本頤庵景摹五山板而臧。

と記し、李鶚大字本が、即ち京都高階氏所蔵の覆蜀大字本五山版であることを明らかにしている。また、『日暦』天保四年五

月八日条に慊堂が山本頤庵から「大字本影抄爾雅」を借りたことが記されていたが、（エ）からも頤庵が大字本を摸抄していたことが明らかになった。曲直瀬家や頤庵の他にも、『訪古志』の小島尚絅補注本では、大字本の所蔵者の項に「寶素堂影摸傳藏」と補われており、[40] 医学館の学者の間で大字本を摸抄していたことがうかがえる。

欄上に墨筆で書き入れられた補注のうち、立之の筆によるものはそれほど多くないが、これらは約之の書入れに先立つものと見られる。漢籍からの引用には『文選』・洪頤煊『読書叢録』・『医心方』・『芸文類聚』があり、日本人は江戸後期の本草学者である佐藤中陵（一七六二－一八四八）の説を引いているが、大字本以外の『爾雅』との校合は見られない。

約之の書入れは非常に多い。（ア）と（ウ）の間が四年空いていることや、書入れごとの筆致の違いから、一度に書入れられたものではなく、複数回に及ぶものと見られる。引用書はこちらも漢籍が中心であり、『尚書』・『毛詩』などの経書から杜甫まで幅広いが、その中でも特に『説文』や『広韻』・『玉篇』・『（経典）釈文』が多く引かれている。国書は『和名抄』・『本草和名』・大田錦城・佐藤一斎『愛日楼詩』が見える。『爾雅』関係書では「郝疏」・「阮元爾雅校勘記序」・「明人刊五雅本」を引くものの、その頻度は低い。巻下の尾題後には、嘉慶二十二年の阮元「経義述聞序」、巻下音釋後に「清阮元揅經室集」・「郝蘭皋戸部論爾雅書」・「高郵宋定之論爾雅書」を転写している。

約之の書入れで特徴的なのは、冒頭に「家大人曰」として父立之の説を記す点である。頻度はそれほど高くないが、例えば、上巻第十張表の書脳付近に見える「家大人曰今閲左傳南人多有宵之言」という用語に関する説や、（オ）のように版本に関する立之の見解が書き残されている【図10】。（オ）には、

家大人曰、宋板書之末巻唯有経注字数者北宋板也。毎巻末有之者南宋板也。而此本松崎跋曰、此本係北宋仁宗時刻板。

とあり、巻末の経注字数から北宋版と南宋版の違いについて述べ、慊堂が北宋版と鑑定した底本に南宋版の特徴があることを指摘している。これは、底本である崇蘭館本の刊行時期を特定する上で重要な書入れと言える。しかし、立之は北宋版と南宋版の違いを指摘しているにもかかわらず、自身が編纂に携わった『訪古志』では、慊堂の鑑定を採り「北宋仁宗時刻本」「間

有南宋高宗時補刊」とするにとどまった。[41]

また、約之の書入れは校訂や補注だけでなく、封面や下巻末等に『爾雅』の成立や内容について、主に清朝考証学者の解題を引用し、所々案語を附す。本稿ではその内容について踏み込まないが、（ク）は約之の主張が表われた一文といえよう。約之は、慊堂跋文の首（校譌第五張裏）の欄上に阮元「爾雅校勘記序」

元搜訪舊本、於唐石経外、得明呉元恭仿宋刻爾雅経注三巻、元槧雪窓書院爾雅経注三巻、宋槧爾雅邢疏未附合経注者十巻、皆極可貴。

を引用し、これに対して、

案西清尓疋之學極盛、而廑抱元明諸本爲極貴本。邦有五山翻刻五季李鶚本、次有此北宋刊本、豈不富宗典文獻足徵乎。

と書入れた【図11】。この一文で約之は、阮元が「皆極可貴」とした諸本を「廑抱元明諸本」とし、五山覆刻李鶚本や、北宋刊本とみなした崇蘭館本という日本の蔵書が中国に劣らないことを自負している。森立之の嗣子として『訪古志』の編纂に携わり、日本伝来の貴重な書物に精通していた約之の立場が、この一文からうかがえる。

おわりに

以上、斯道文庫の蔵書を中心に、松崎慊堂の『爾雅』校訂及び刊行について述べた。椧斎がいつ影宋本の底本を摸抄したのか、定かではないが、仮に文政四年に崇蘭館本を摸抄したとしよう。すると、鈴木瑞枝氏が述べるように、文政・天保年間の校訂事業において、影宋本の基礎的な校訂が行われたと見るのが妥当であろう。影宋本の跋文によると、椧斎と慊堂はこれを覆刻しようとしたが、校合のための善本が入手できず、十分な校訂が不可能だったために、その当時は刊行が見送られた。文政十二年に至って集中的な校訂が行われたのは、宋鈔絵図本等、校訂に必要な環境が整ったためであろうか。その後、大字本を入手したことによって、ようやく影宋本の校勘が完成したと考えられる。底本となる影宋本も、主たる対校本となった大字本

も、ともに椛斎によってもたらされた。慊堂自身が「吾志於復古、得之椛斎爲多」と、狩谷椛斎の影響について評しているとおり、校訂及び刊行の背景に椛斎の影響が強くあったことは明白である。慊堂だけでなく、大字本が山本頤庵や曲直瀬家、小島宝素によって摸抄されていることからも、椛斎がもたらす善本が江戸の学者たちに大きな影響を与えたことがうかがえる。

また、本稿で斯道文庫蔵影宋本B（ハ〇九C・五－一九・一）がその校正刷であることを指摘した。該本には書入れがなく、該本だけでは、この版に慊堂がどのような校正を加えたのか明らかにし得ない。森約之の書入れ（ウ）によれば、約之は慊堂の自筆校本を所有していたという。残念ながら、筆者は現在この慊堂自筆校本を発見できていないが、自筆校本を参照できれば、慊堂の影宋本校訂の有り様がより鮮明になることが期待される。今後の課題としたい。

註

1　浜野氏の旧蔵書は、浜野氏が亡くなった翌年の昭和十七年（一九四二）に麻生氏が購入し、当時九州にあった斯道文庫へ寄託された。その後、昭和五十五年（一九八〇）に寄贈となった。入蔵の経緯は、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『斯道文庫三十年略史』（編者、一九九〇年）、大沼晴暉「浜野文庫善本略解題」（大沼晴暉・慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵浜野文庫目録』汲古書院、二〇一一年）を参照されたい。

2　慊堂の伝記には、鈴木瑞枝『松崎慊堂―その生涯と彼をめぐる人びと』（研文出版、二〇〇二年）、小宮厚・町田三郎『松崎慊堂・安井息軒』（明徳出版社、二〇一六年）がある。

3　『慊堂全集』巻一（以下、『全集』とする。底本は『松崎慊堂全集』全六巻、冬至書房、一九八八年に拠る）。

4　徳泉さち編『狩谷椛斎―学業とその人』（早稲田大学會津八一記念博物館、二〇一七年）所掲の拓本（十五－十七頁）に拠った。

5　以下、『日暦』の引用は、主に山田琢訳注『慊堂日暦』全六巻（平凡社、一九七〇－八三）に拠った。しかし、山田訳本は底本である静嘉堂文庫所蔵の原本と比べると、事項の日にちが異なる等の誤脱が見受けられる。その場合、三村清三郎等編『日本芸林叢書』（十一・十二巻、六合社、

一九二九年）所収本に従って修正した。

6 『全集』巻十。

7 中根淑『香亭雅談』巻上「稲河玄度號稲川、住駿之府中。聞狩谷棭齋精説文、介松崎慊堂通姓名、而未相見也。某年棭齋遊駿州（中略）乃招一過客、偕酌于酒亭。談甚熟。棭齋問焉曰、子何許人。曰、府中。曰聞府中有稲川居士者、子豈知之歟。曰、知。曰、其人好字説、信乎、曰、然。棭齋意頗動。出亭行里許、客辭而去。棭齋至府中。經二・三日、訪稲河氏通謁。閒焉主人出。見之則前日所遇也。棭齋驚喜、拊掌而笑。由是深交結。」（吉川弘文館、一九二〇年）

8 それ以前にも、文政八年四月二十九日条「説文に、撃中の声なり、殳に従い医声」のように、『説文』を参照する記述はいくつか見られる。

9 慊堂の説文会の経緯については、吉田篤志「近世後期の考証学」（大倉精神文化研究所編『近世の精神生活』続群書類従完成会、一九九六年）及び藤山和子「江戸後期の考証学者と段玉裁の『説文解字注』」（『大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要』第四巻二〇〇三年）に詳しい。

10 墨筆の他、稀に藍筆・朱筆の校注が見られることから、該本の校読は複数回行われたと考えられる。

11 李代英勝「松崎慊堂における考証学の展開―近世的思惟の一考察」（成城学園五十周年記念論文集編集委員会編『成城学園五十周年記念論文集（文学）』成城学園、一九六七年）及び吉田篤志氏前掲論文、藤山和子氏前掲論文。

12 斯道文庫蔵狩谷棭斎自筆書入本『爾雅註疏』（明嘉靖）刊（〔李元陽〕）、〇九一・ト七四・六）の識語によると、該本の校訂は、文化八年（一八一一）五月に「明刻単注本」・「経注本」・「経典釈文」、翌九年八月及び九月に「鄭樵注本」によって行われ、文政十三年三月に「元刻注疏本」、同年五月には渋江抽斎と「昌平學蔵槧」本によって行われている。この他、校合注には「単疏本」「雪牕本」「正徳本」の語も見える。

13 『日暦』に登場する人物については、鈴木瑞枝「『慊堂日暦』主要人物索引並びに解説」（『安田学園研究紀要』第二十号、一九八〇年）、同「『慊堂日暦』を中心にしてみた慊堂周辺の人々―続『慊堂日暦』主要人物索引・索引補遺・並びに解説」（『安田学園研究紀要』第二十一号、一九八一年）を参照した。

14 山田訳本『日暦』は羽倉簡堂への伝言を十日の条に配しているが、静嘉堂文庫の原本及び芸林叢書本では七日の条にある。従って、本稿でも七日とする。

15 『訪古志』には、求古楼所蔵明弘治間刊本の他に、昌平坂学問所蔵明景泰七年刊本が著録されている。

16 大聖寺は、寛延三年に祥雲寺香林院の東天和尚によって開かれた寺院である。現在は廃寺（『新修渋谷区史』中巻、東京都渋谷区、一九六六年、一二三一－一二三三頁）。『日暦』によると、文政十年七月六日、慊堂は山梨稲川の小祥のため、陰山量平等と大聖寺に集まり、稲川の主前で『六書音韻表』を読み、故人を偲ぶ会を行った。同年七月十九日と二十九日にも桉斎と大聖寺で『説文』を読んでいる。

17 斯道文庫蔵『〔典籍開雕意見〕』稿本（ハ〇九C・一－二二一）には次のようにある。「もし此度此五經を官版に被仰付候ハヽ愚案には易書春秋三經ハ單疏を刻候事尤宜敷候得とも足利氏の時刻板及活字本之經註を主とし單疏掲所之起止により經註を下に編入すれハ此我朝ノ正義會本なり。」

18 具体的な書目は『〔典籍開雕意見〕』及び安井小太郎「慊堂の漢籍翻刻に関する意見」（『斯文』第一編第二号、一九一九年）を参照されたい。

19 これと同様の文が「校勘例」として『日暦』天保五年八月二十二日条に見える。また、同年九月十一日条に「石経校勘例　八月二十二日　今補」これを補う文を記している。

20 『日暦』天保五年八月二十二日条に各書の校勘に用いた本が列挙されている。これによると、『爾雅』の校勘には宋版が用いられた。後述するように、この時点で慊堂が用いた可能性のある宋版には、影宋本の底本となった崇蘭館本あるいは蜀大字本の両方が考えられる。

21 吉田氏前掲論文。

22 『鉤摹石本九経字様』（内閣文庫、経二十三－一）の末尾に附された自跋は「天保十五年夏月」の年記がある（斯道文庫本はこの跋文を欠く）。慊堂はこの年の四月に没しており、まさにその死の直前の跋文である。

23 中華再造善本工程編纂出版委員会編著『中華再造善本總目提要』唐宋編、中国国家図書館出版社、二〇一三年、一一二－一一四頁。

24 国家図書館本では、高宗の嫌名の一つである「敳」を闕くのに対し、影宋本は避けていない。

25 ただし、国家図書館本でも「溝」・「購」は避けていない。

26 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『阿部隆一遺稿集』第一巻、汲古書院、一九九三年。

27 『新修本草』の経緯については森鹿三氏「新修本草と小島寶素」（同『本草学研究』杏雨書屋、一九九九年）。梅谷文夫氏は文政四年の西遊において『新修本草』を摸抄したとする（同『狩谷棭斎』吉川弘文館、一九九四年）。

28 『日暦』天保三年十二月八日に「晴。飯後に荘に帰る。村山来り、棭翁来る。対酌して京報を聞くこと最も詳し」とある。

29 斯道文庫所蔵棭斎書入『考古小録』（八〇九・四－八〇・二）書画二十五に「福井丹波守蔵　文政四年四月観」との書入れがある。

30 鈴木氏前掲書、二八五頁。

31 『爾雅』以外には、段玉裁注『説文』・『経典釈文』・『一切経音義』・『集韻』・『広韻』・『群経音辨』の他、臧琳や袁廷梼・厳傑という清朝考証学者の成果を参照している。

32 郝懿行の『爾雅義疏』は、校譌に「近日西舶載來」と紹介されており、当時新しく将来された書物であったことがうかがえる。『爾雅義疏』は、道光九年（一八二九）に『皇清経解』所収本が刊行された。『日暦』には、天保六年九月六日に「すなわち経解中の校勘記二冊・爾雅義疏二冊・叢鈔一冊を取り、長塩宗泉をよぎれば、姻事はすでに結べり」とある。また、天保八年正月二十一日に「弘斎に陶集、小島に礼記・爾雅義疏および彼の校本」とあり、同年同月二十四日に「小島　石経礼記〈古本礼記を借る〉　爾雅義疏」とある。

33 この他、『日暦』の蜀大字本に関する記述は、天保十一年四月十日に「今の三角氏所蔵の大字本爾雅は、蓋し南宋時に北宋蜀本を覆刻す」とある。山田訳本はこの一節を同年四月末日に配す。

34 神宮文庫本は古典研究会によって影印されており（長澤規矩也解題『神宮文庫蔵　爾雅』古典研究会叢書別刊第一、古典研究會、一九七三年）、これによって序文や蔵書印が確認できるが、大尾の「古經／堂」の印記は映っていない。

35 国会図書館蔵稿本『訪古志』（一四三－二〇、森立之・約之補注本、寺田望南旧蔵）には「靜節山房蔵」と追記されており、寺田望南（一八四九－一九二九）が所蔵していた

ものと考えられる。

36 「褘」は校譌に「説文从衣之褘、無从示之禕。此本从衣不誤、大字本从示非」という。しかし、神宮文庫旧蔵大字本ではここを衣偏の「褘」に作っており、慊堂が校合に用いた本と異同があることがわかる。なお、後述する斯道文庫蔵森氏書入れ本は大字本によって慊堂影宋本を再校訂しているが、ここには異同を書き入れていない。

37 前掲『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵浜野文庫目録』では、該本を「覆宋修刻本」とする。

38 川瀬一馬『日本書誌學之研究』講談社、一九七一年、七九〇頁。

39 約之は、立之より早く明治四年（一九七一）に没している。

40 長澤規矩也「経籍訪古志」考」（『長澤規矩也著作集』第二巻、汲古書院、一九八二年）。

41 覆蜀大字本五山版には、巻下にのみ経注字数が刻まれている。『訪古志』は京師高階氏蔵本について、大尾識語の「李鶚」を後唐の明宗の命により五経を書いた「李鍔」と同一人物とし、該本の底本は、この李本を北宋時に覆刻したものであり、「李鶚」の識語は後蜀本の面目を遺すものであるという。この五山版の底本あるいはその同種本と見られる刊本が、現在、台湾故宮博物院に蔵されており、林柏亭主編『大観―宋版図書特展』（台北：国立故宮博物院、二〇〇六年）の解題では、故宮本を南宋国子監刊とし、北宋監本の覆刻と見ているようである。

［謝辞］

本稿執筆に当たり、文学部の佐藤道生教授のご厚意により貴重な南北朝刊『爾雅』を拝見することがかないました。突然のお願いに快く応じてくださった佐藤先生に、心より感謝申し上げます。

【図1】影宋本A（斯道文庫八〇九C・七－四・一）

爾雅卷上

郭璞注

釋詁第一　釋言第二

釋訓第三　釋親第四

釋詁第一

初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也尚書曰三月哉生魄詩曰令終有俶又曰俶載南畝又曰訪予落止又曰胡不承權輿胚胎未成亦物之始也其餘皆義之常行者耳此所以釋古今之異言通方俗之殊語林烝天帝皇王后辟公侯君也詩曰有壬有林又曰文王烝哉其餘義皆通見詩書弘廓宏溥介純夏憮尾墳嘏丕弈洪誕戎駿假京碩濯訏宇宮壬路淫甫景廢壯冢簡剪昄晊將業席大也詩曰我受命溥將又曰亂如此憮爲下國

【図2】影宋本爾雅校譌草稿（斯道文庫八〇九C・一－二一・一）

宋本爾雅校譌

此本係北宋仁宗時刻板。南宋高宗時補刊。卷四板十五板卷中三板三板六板七板十板十二板十六板板心各有重刊等字卷上板二板三板八板九板十板十二板四板十板刊重刊等記餘皆原刻故異祖諱

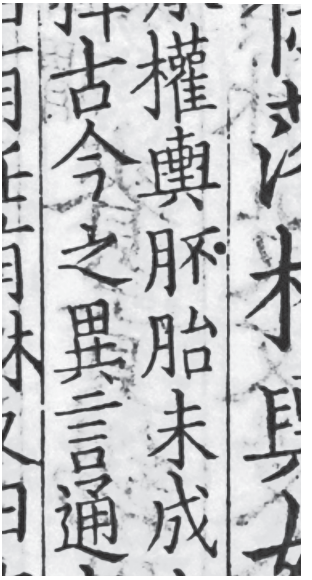
敬（嫌名驚）宣祖諱弘殷太祖諱匡胤（舊名玄朗）眞宗諱恒仁宗諱

禎（嫌名貞）禎（嫌名貞）徵皆缺筆英宗父濮安懿王允讓英宗諱曙（舊名宗實）神宗諱頊俱不闕筆欽宗諱桓補刻時修改高

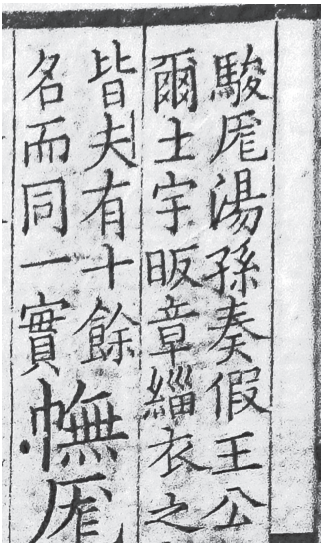
宗諱構凡从冓字遘溝購皆缺筆是本皆不缺筆但

係重刊處缺遘字中一筆餘溝購等字係原刻者及

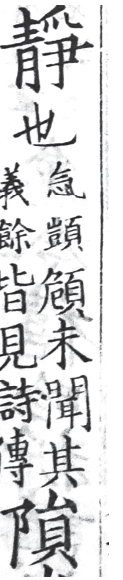
孝宗諱昏（嫌名愼眞）光宗諱惇（嫌名敦）皆不缺筆



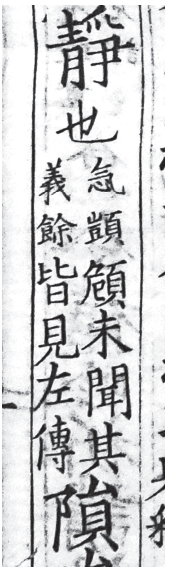
【図3】影宋本A巻上第一張表第七行注「胚」傍点



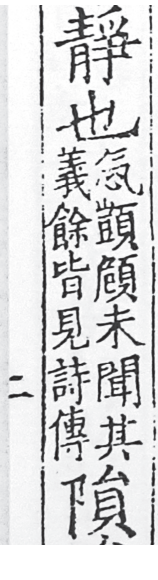
【図4】影宋本B（八〇九C・五－一九・一）巻上第一張裏第二行注「夫」傍線



【図5a】影宋本A巻上第二張表第十行注「詩傳」



【図5b】影宋本B同所「左傳」



【図5c】国家図書館本（中華再造善本所収）同所「詩傳」

爾雅卷上

郭璞注

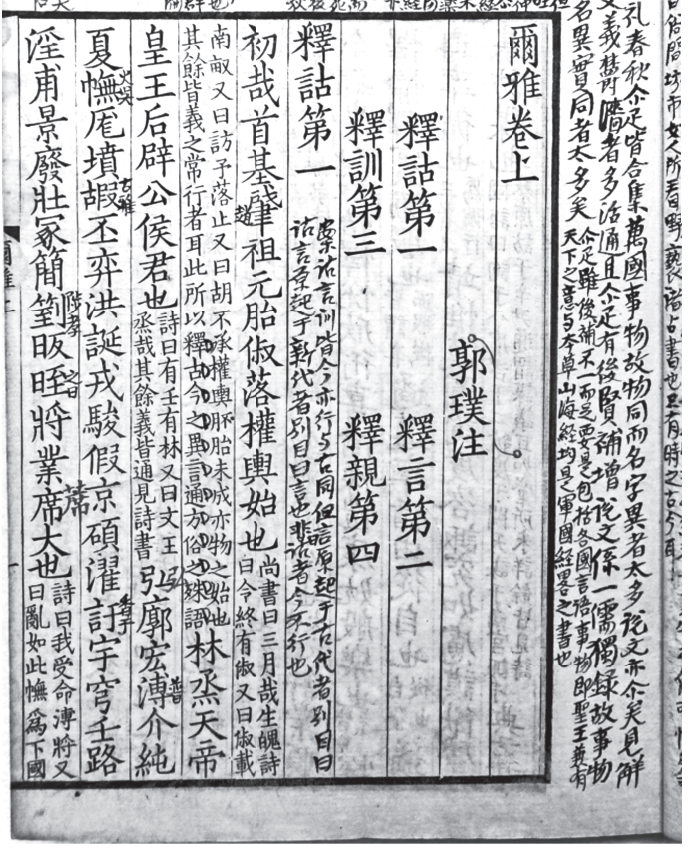
釋詁第一　釋言第二

釋訓第三　釋親第四

釋詁第一

初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也尚書曰三月哉生魄詩曰令終有俶又曰俶載南畝又曰訪予落止又曰胡不承權輿胚胎未成亦物之始也其餘皆義之常行者耳此所以釋古今之異言通方俗之殊語林烝天帝皇王后辟公侯君也詩曰有壬有林又曰文王烝哉其餘義皆通見詩書弘廓宏溥介純夏憮尾墳嘏丕弈洪誕戎駿假京碩濯訏宇宎壬路淫甫景廢壯冢簡劉昄晊將業席大也詩曰我受命溥將又曰亂如此憮爲下國

【図7】森氏書入本（〇九一・卜一二五・一）巻首



爾雅卷上

郭璞注

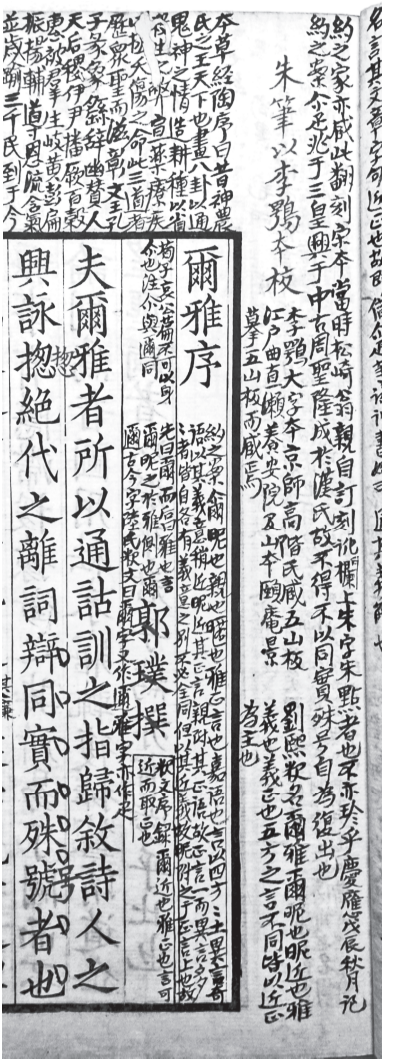
釋詁第一　釋言第二

釋訓第三　釋親第四

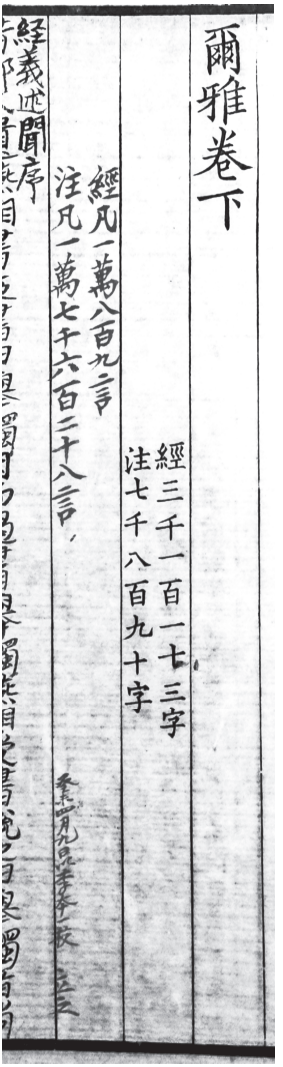
釋詁第一　案詁言訓皆今亦行之古同但詁原起于古代者別目曰詁言承起于新代者別目曰言也非詁者今亦行也

初哉首基肇祖元胎俶落權輿始也　尚書曰三月哉生魄詩曰令終有俶又曰俶載南畝又曰訪予落止又曰胡不承權輿胎未成亦物之始也其餘皆義之常行者耳此所以釋故今之異言通方俗之殊語　林烝天帝皇王后辟公侯君也　詩曰有壬有林又曰文王烝哉其餘義皆通見詩書　弘廓宏溥介純夏幠尾墳嘏丕弈洪誕戎駿假京碩濯訏宇穹壬路淫甫景廢壯冢簡訥昄晊將業席大也　詩曰我受命溥將又曰亂如此幠爲下國

【図8】森氏書入（イ）（ウ）（エ）



【図9】立之書入（キ）



爾雅卷下

經三千一百一七三字

注七千八百九十字

經凡一萬八百九二言

注凡一萬七千六百二十八言

【図10】約之書入（オ）

注之甥謂我甥者吾謂之甥也又曰甥母之兄弟為舅妻之父為外舅舅婦同義而姪通男女甥唯係男甚兄弟姊妹之子為甥為姪之係侄甥者侄對伯父之詞

家之人自宋板書之末卷唯有經注字數者北宋板也每卷末有之者南宋板也而此本校時跋曰此本係北宋仁宗時刻板

姻兄弟古者皆謂婚姻為兄弟 嬪婦也書曰嬪于虞 謂我舅者吾謂之甥也

婚姻

爾雅卷上

經四千一百三十二字
注五千四百一十六字

【図11】約之書入（ク）

阮元爾雅校勘記序曰臣元搜訪舊四本於唐石經外得明吳元恭仿宋刻爾雅經注三卷之數雪窓書院爾雅經注三卷宋刻爾雅疏未附合經注者十卷皆極可貴

案西清劄記之鈔本極盛而齋主抱元明諸本考極貴本邪有五山翻刻五本之本四種本次有此北宋刊本豈當為宋刻文獻足徵乎

此本係北宋仁宗時刻版南宋高宗時補刊敬驚弘殷匡胤玄朗恒楨貞禎徵等字皆缺筆其係補刊者版心各有重刊重開記又桓遘二字缺筆餘溝購等字及桓字係原刻者皆不缺筆此可證也

原本京師大醫某君所藏亡友狩谷卿雲借鈔極精余病有宋以來此經滅裂欲訂一